

# 京都部落問題 研究資料センター通信

第22号

発行日 2011年1月25日 (年4回発行) 編集・発行 京都部落問題研究資料センター

## 報告二〇一〇年度部落史連続講座

当資料センター主催の「部落史連続講座パート2」を一月二六日、一月二〇日に京都府部落解放センターで開催しました。

この講座は、五月から七月にかけて崇仁地区で開催した部落史講座に関連して、崇仁地区周辺の地域の歴史について学習することを目的として企画され、毎回二〇名を越える参加がありました。講演の要旨は次の通りです。

### 第1回

#### 続川の流れに人の身は

六条河原の幕末維新

講師 辻三子子さん  
(元京都文化短期大学教授)

五条東洞院あたりに住んで皮細工や刑吏役をしていた人たちが豊臣秀吉の許可をうけて六条河原に家を建てはじめようになり六条中島村ができる。その人々が正徳二年(一七二二)に七条通りの南の地、柳原へ移転していったあとの六条河原の様子について以下のよう

に話された。  
六条河原の地域は高瀬川の開通によって大坂・伏見・京都を結ぶ物資の輸送路として経済的に大きな発展をしており、享保一三年

(一七二八)には米の売買所ができ、明治になってからも米会所や油会所が作られ、京都の経済活動の中心地となっていた。そして、人と物の活発な動きの中で、この地域には遊所がつけられるようになり、その流れを「京都府下遊郭由緒」や地図を使って詳しく説明された。

また、扇子と花札の生産地としても発展していき、明治になると花札の九五%がこの六条河原の地域で生産されるようになった。尚この地域で任天堂が明治以降、昭和五〇年代まで花札の生産を行っていたということである。そのほか、六条河原に本拠地をもっていた侠客の会津小鉄との関わりなどについても話された。

### 第2回

#### 京都市東九条における

スラム対策と同和行政  
高度成長期の部落問題と政策的認識

講師 山本 崇記さん  
(立命館大学非常勤講師)

東九条のまちづくりの運動に関わり、「希望の家」という地域の福祉センターの五〇年史をまとめる作業を続けるなかで、東九条と

非常に密接な関係にある崇仁地区との関係を、部落と在日というカテゴリーで見るのではなく、地域・住民という視点から見えていくほうがリアルティーがあると考えられるようになった。

戦時中から疎開事業によって東九条は被差別部落民と在日朝鮮人が混住する地域としての性格を強め、戦後高度経済成長期には、不良住宅地区として非常に似通っていく。しかし、国策として同和行政が進展していくのに伴って双方の境界線が明確になっていき、施策においても明確な差が生じてきた。そういう中でも、「生活と健康を守る会」、「セツルメント、地元青年たち」、「希望の家」などの自主的な社会事業や住民運動の実践は、崇仁地区と東九条地区を横断・往復して行われていたのである。それが分断されていく大きな要因は、「同和地区と周辺地を相關関係でとらえ(ることをせず)」同和といわれれば同和しかやらないという風に、行政が硬直していた」という研究者の指摘があるように、行政権力であった。

また、東九条地域では行政の不作為の中で結果的に自主性と共同性が培われていく。こういった皮肉な面を現代の行政と地域社会との関係にどう教訓化できるのかが重要なテーマであると強調された。

## 三浦参玄洞の水平社記事について

## 「中外日報」を中心に (一)

秋定嘉和

(京都部落問題研究資料センター所長)

三浦の「寺を出るまで」は小論ながら大切である。西光や阪本と交わった寺をなぜ出たのか。小作争議の解決にあたった三浦や阪本に対して村民(地主・中産層・小作)が裏切ったことが離村の理由であったこと。引き止める阪本や水平社員、農民組合、職工たちとの別れの事情、農民は身近な利害で動くこと、大阪、京都へ向くさみしさなど長文の内容で今日の検討をまつている重要な文章である。また、三浦の新しい受容者たち、弘済会(上山)、四天王寺(武藤)、大阪仏教(松岡)などの名も記されていた。(二十七年九月)

寺を出るまで

(一)

出寺直後寺を出るまでの経緯を書いて発表しやうとしたが色んな誇張が入つて来るので自己に亘ることは一切書かないことにしやうと廃めて居た。所が過日帰社して涙骨先

生からそうではない是非書けとすゝめられたので不取敢筆をとつた。私を知つて下さる方々への通信のつもりで読んで下さい。

一

私が寺を出たといふことは私の弱さが動機したことを劈頭に告白しておく。私は本紙に於ても屢々書いた通り寺院住職者として農村の階級対立に対し公正な批判をすゝめて行く事は最適地位に置かれて居ると信じて居た。そしてその通り私はこれまで実行して来た。しかし今の農村は正しき人間の批判を容れるべくあまりに不合理づけられて居る。封建的残滓と初期資本主義的物質性が多分に残存して居る。階級対立に正しき批判が容れられなかつたら社会の進歩は杜塞せざるを得ない。私は各人がより肥えて生くるよりもより正しく生くること

に興味をもつ時代の来るのを待つたが、それを最後まで待つ敢為性を欠いて居た。つまり私は敗北したのである。

二

私が現村長、前村長並に水平社の中央委員たる阪本清一郎氏と四人で、農生会なる批判団体(決して協調団体でない)を拵へて自村の小作争議の解決に当つたことは当時の本紙に書いた通りであつた。第一年(大正十四年度)は地主の間にも厚意を持つものがあつて四割の減貢で程よく解決した。第二年度に於て農生会は非常な努力を以て自村の約二百町歩の田地に対し公正小作料を改訂して之を地主並に小作に発表し之に準拠せん事を要求した。しかるに改訂小作料の如き何処の地主も小作も共に悦ばないものである。その理由は地主は減収を憂ひ小作はより多き減貢の口辞を失ふからである。農生会の公正小作料も御多分に洩れず双方から「考慮しおく」だけの言質を土産に態よく一蹴された。加之二年目の小作納米は会内に彼是手違ひをして居る間に直接小作対地主の交渉となり無理々ながら大部分解

決したが最後に私の大字だけが争議に入るやうな事宜に陥つた。私は百方訴訟行為を阻止しやうとして奔走したが狂暴な地主(私の寺の檀家総代等もその中であつた)達はきかなかつた。そして僅かばかりある私の寺の田地に対しても彼等と等しく訴訟行為に出るべく私に要求した。私は無論一考を費す余地もなく之を拒絶した。すると彼等地主達は「寺の住職でありながら所得の減収を顧みないひどい坊主である」と悪宣伝を始めた。多数中間層の人達は之に雷同した。しかしそれは一般に迷惑をかけることでもないから無事に済んで居た。

(二)

三

その時頃から私の無産運動はかなり露骨なものがあると地主達に意識されるやうになつて居たらしい。それは私自身に於て正しき批判がうけ容れられなければそれが十分容れられるやうになるまでの素地を造らねばならぬといふ努力がかなり無遠慮に働いて居たからだ。そのうち私はある零落した家の畑地が一人の地主の所有地に捲込まれて居る

事実を発見し之が奪還方に就て奔走して居る中にある狂暴な地主へにして檀家総代）から私の態度の声明を要求された。私は無論彼の要求に対して私の良心を欺かずして所信を断言した。いはく「××寺住職として私はあなたにお話する、葬式や法用参りだけして大人しく世間のことに關はらなかつたらあなた方には都合がよからうが私はそれだけでは坊主の所作ではないと思ふ、寧ろ私は生々しい現実問題に参徹して行つて人間生活の真実味を獲得し同時に社会正義の勝利を計るこそ私共坊主の任務である、しかし之が気に入らぬとあらば不信任運動でも起して私の誠首を本願寺に迫るがよい、但し本願寺が諸君の妄動を容れて不合理に私を圧迫することもあらば私は断じて屈服しない、私は進んで本願寺とも抗争して正しき社会の批判に訴へる」と。之を聴いた地主は肅然として言もなかつたが、最後に何か決するものゝ如くあつた。

#### 四

地主と会談後私は第三運動の爲め奈良県庁を訪うて農会の幹事や小作官達と謀議し其

夜同市に一泊して帰宅して見ると腹心の青年が三名来寺して私を待つて居た。何か事變のあつた事を予覚しながら彼等の所談を聴くと実は昨夜本堂で門徒会議が開かれて寺祿の問題が討議されあなた（自分を指す）が訴訟に加はらなかつた事が種々論難され同時にF（狂暴な檀家惣代）の檀家惣代並に門徒離脱が発表されたといふのであつた。そして更に、会議の内容を訊すと同席には平素心を許し合つて居ると思つて居た大部分の間層が出席して盛んに地主に阿諛し且彼等に雷同してFの離脱を黙認したといふのであつた。

私の出寺を決心したのは正しくこの時であつた。私は百の地主共が束になつて飛かゝつて来ても恐れるものでない事實私は彼等に対して毎度「私の仕事はあなた方を赤裸にしてあげる事だ、あなたが真赤裸になつて大地の上にとり返すことが出来るのだから」と云つて居る位だからだが地主でもない小作でもない日和見主義的な多数中間層の人々が朝に自分の許に来て

は私の運動を鞭撻し夕には地主の門を潜つて彼等の爲に謀議する態度に対しては全く耐え切れない。それも二年や三年のことなら兎に角二十年といふ長い間の努力が毫も酬ひられぬとして見ると最早や考へねばならぬ時が来たかと考へた。そして同時に成人たる私等は兎角世間はこの様なものと高を括ることも出来るが之れから眞実生活を教育づけて行かうとする子供等の爲には断じてならないと思惟した。私も今年ハヤ四十四歳である。頭が盛に禿げて下髯がだん 白くなつて来る。いつまでもこんな虚偽と欺瞞の中に生きて居ては誰に対してよ

#### (三)

#### 五

先ず農民組合のKに話した。Kは泣いて私を止めた。しかし、私はいつた、「私は弱い、弱い私見たやうなものにもたれて居ては、諸君の運動はいつまでも煮え切らない、そして私も出れば強くなる事が出来る、四畳半で二間槍を使はうとした私の無理がなくな

る、君達に対してはまことにすまぬが私の氣儘を許してくれ！」と。次に阪本清一郎氏に話した。氏は寧ろ怒つたが運動の大局から考へ直してくれて快く肯諾してくれた。さあこの二人の承諾さへ得れば出寺は大丈夫だと安心した。翌朝出寺を宣言すべく別の檀家総代と区長とに手紙をつけた。薄々事情を感付いて居たらしい彼等は容易に出て来なかつた。私は待ち切れないで門扉に大書広告した。

小生長き間の寺院生活に疲れたるにより暫時出寺致候追つて代務は定むべし。

其日夕暮広告を見て門徒中が倉皇集つて来た時分には阪本氏の厚意によつて荷造りの大部分は出来て居た。彼等門徒は直ちに七名の交渉委員を挙げて私に留任を迫つた。委員中には暗に私の放逐策を講じて居たものもあつたので私は可笑しさを耐へながら話して居た。夜の一時頃になつて寺附の娘として育つた妻も呼出されて尋問されたが彼も勇敢に拒絶して仕舞ふた。かくて其夜三時頃十三代継続して私自身二十年間も住んだ寺としばらく縁を断つことが承諾

されたのである。そしてこのしばらくが果してどの程度の時間を意味するものであらうか。

## 六

翌日は残りの荷造りと寺務引継(といつても住職から住職へではない私は色んな会を拵へて居たからその会計引継等である)とでかなり忙はしかつた。家内中は更生の喜びにふるへつゝ首途の準備をした。夕頃昨夜の交渉委員から住職辞職の一札を書いてくれた。私には彼等に対し自らの心の醜さに恥ぢないか?と詰つてやつた。昨夜の留任勧告と今の一札要求とに矛盾を感じないかと訊いてやつた。私はx x 寺住職の地位は露程も恋しくはないがx xの土人とはあくまで懐かしいと述べた。そして水平社を初め農民組合、瓦工組合其他の人達からの必死の要求があつたから住職権は暫時保留すると明言した。此時以来多数門徒が鉛のやうな重苦しさを感じ出したことはハッキリ感知される事実である。序だが私は自ら欲して出寺したのであるが同時に地主達のデリケートな排斥運動に知りつゝ乗つた

ものであることも書いておかなばならぬ。

## (四)

## 七

昭和二年八月二十四日、水平社の荊冠旗、農民組合、瓦工組合其他無産団体の各赤旗を列頭にして多数の組織無産農民労働者達は遠近から寄り集つて私の出寺を賑はしてくれた。勿論地主達も送らぬ訳には行かなかつた。私服が二名列の前後を護つた。「野に虎を放つものだ!」と或一人は痛語した。私は唯これまで彼等から思はれて居たかと思はゆさを感じるばかりで個個の挨拶も兎角淀みがちであつた。子供の学友が駆まて来て泣いてくれたのには聊か感傷的になつた。荷物は二台のトラックで私等は汽車で出発した。汽車中で計らずも此日が妻の誕生日であつたことに気付いた。

## 八

私は弱くて寺を出た。だが弱いばかりで寺は出られるものではない。私を見送る為に子供のものを質入れして金を拵へたといふ水平社のH君。金がなかつたからトラックに乗つたといふK君T君。地主

達の眼を外らして次の駅から乗つたF君。夫等の人達を前にして私は翌朝わかれの酒を汲んだ。

幸ひに私は諸君のお陰で一人前の生活者になることが出来た。これからの運動は一人前にやれるから安心して貰ひたい。必ずともにより正しく生くることを御互に忘れまい。豚のやうに肥えても正しくなくて詮がないからな。など話した。彼等は「復讐クマ」と叫んでしきりに盃をかへた。三昼夜不眠状態であつた私も此時はじめて睡気を覚へて来た。

丁度私を兄弟のやうに思ふて下さる弘済会の上山さんが直ぐ東隣りで御夫婦共真心を尽してガスのたきかたから水道の使ひ方まで御指導下さるので一家は初めての都会に脅へるやうのことはない。四天王寺の武藤さんや大阪仏教の松岡さん等にも散散厄介をかけて居る。かくて出寺後既に二十日あまりも経つた。

最後に私は私を知つて下さる同志達に対して申しておかねばならぬ。私の今回の出寺は平素の希望が偶々私の無産運動によりて機会づけられた

までのものである。それを思ふと同志に対しては返す功利的な態度をとつた私自身の罪を慚謝せねばならぬ。そして出寺して見ているよよいよハツキリなつたことは長い間お養ひに預つたx xの土と人々にたいしては終生働きかけることを忘れてはならぬ事である。放たれた教信沙弥を思ひやりつつ朝暮貧しき仏壇の前に跪座して、私かに思ひ固めることが多い。(九月十二日二十年入寺の日)

三浦とフォイエルバツハ、マルクス

三浦の宗教との接点にふれておく。佐野学に対しては好意をもっているが「宗教は阿片なり」の認識不足を批判、しかし佐野の述べた片山批判は好意的に受止めている(二三年一月)(二七年二月)。クリスチャン青木律彦や志賀支那人には接近、交通を重ねていた(二三年七月)。北原泰作の直訴事件は日本の恥辱とするが、国民の反省が必要とし(二七年一月)なお、三浦は「フォイエルバツハ」の「神が人間を造つたのではなく人間が神を造つたのだ」を引用、マルクスもそれを引用、より拡大解釈しているという。そして宗教を

闘争の対象にしていけないとする立場をとり、この立場と三浦の立場の交叉点をさぐっている（一八年五月）。

### 西光批判

三浦の批判はかつての同志、後輩である西光万吉や阪本清一郎、米田富ら最高幹部の「退嬰性」まで及んだ。なぜ疲憊したから青年同盟に地位をゆずるのか。水平社の責任は解放運動、無産大衆、さらに民族の霊的覚知につながっていることを述べ激励した。二年ぐらいの運動展開で退陣したことに深い怒りを表明した。

次に最高幹部の退嬰的方向転換は最も吾人の痛憤を覚えしむる所のものである。彼等は疲憊したから青年同盟に其地歩を譲ると謂ふ。青年同盟に其地歩を譲るのはどうでもよいが僅か一年や二年の運動位で疲憊したとは何事であるか！尤も個人が疲憊したからとて所詮ないこと吾人もよく是を承知してゐるが抑も「疲憊した」といふ言葉の中には聊か過去の戦功に誇り多少とも何ものにか安心した意味が含まれてゐるではないか？若し此吾人の所見にして違はなかつたならば全国水平社の

命運も極めて稀薄に近づいたと断ぜねばならぬ。普通の政治運動とか利権運動とかには疲憊したといふ事も或は許されよう。併し内部生命の発露たる人間の解放運動には疲憊といふものが潜入する隙のないものなることを思はねばならぬ。元より運動そのもの、歷程には一張一縮は免れない併も百度その一人に帰つても鉄石を徹して尚止退を許されざるは生命流出の人間解放運動そのものではないか！

思へ、水平運動は単に水平社それ自身の解放運動のみに止まるものではない。其反響は広く普ねく慮げられたる無産大衆の上に及ぶものである。単に無産大衆のみではない。自ら倨傲に居て人間の礼讃すべきを忘れ共存共栄の原理を見失ふた多数頑衆の上にも多大の智識と覚醒とを与へるものである。即ち水平運動の盛衰は実に全日本民族の霊的覚知に至重なる関係を有するもので其消長は直ちに我国社会の興亡に影響するものたる事を信ぜねばならぬ。（一九二四年九月）

（次号に続く）

### 本紹介

## 「ごくふつうの人々」によるアーカイブズのために 教会アーカイブズ入門

### 記録の保存と教会史編纂の手引き

（東京基督教大学教会アーカイブズ研究会編）

杉本 弘幸

（京都市市政史編纂助手）

うことを目指して、編まれた書なのである。

通例により、本書の目次を見てみよう。

第一章 教会アーカイブズへの接近

（山口陽一）

コラム わが家のアーカイブズ

第二章 三年あれば教会史はできる

札幌元町教会40年史を例に

（鈴江英一）

コラム 埼玉県宮代町 和戸教会の

アーカイブズ

第三章 記録の残し方（新井浩文）

第四章 記録の整備と整理の仕方

アーカイブズの実践（杉浦秀典）

第五章 記録の伝え方（阿部伊作）

附録

どのような記録が教会にあるのか？

教会アーカイブズを始めるための

チェックリスト

本書は、教会記録保存と教会史編纂のための手引書として編集された。その特徴はこれまで、歴史学やアーカイブなどの知識や史料整理の経験のない「ごくふつうの人々」のために書かれたということである。これまでも史料保存・自治体史編纂・文書館関係の類書は数多く出版されているがそれはあくまで、専門職やそれらの業務にかかわる人々、または大学院生などの「専門家」予備軍たちを対象としたものが大半であった。

しかし、本書はあくまで教会の信徒自身による「教会アーカイブ」の形成を目指している。つまり「専門家」のみに頼らず自分たちで、みずからが所属する組織体の史料保存と活用を手作りでおこな

教会アーカイブズ入門 参考リスト  
さらに学びたい人へ  
キリスト教関係アーカイブズ・データベース  
イレクトリ  
教会アーカイブズを作るため、アーカイブズをたくさん見学しましょう！

以上のように、歴史学やアーカイブズの専門家のいない「教会」における教会史の編纂や教会の記録の整備や整理・保存の方法をわかりやすく伝えようとした書であることは理解できよう。また、教会が自らの資料を記録し保存するにはどうすればいいかという実践的な解説と教会記念誌の編纂発行に関するマニュアルを提示している。

この書を編集した「教会アーカイブズ研究会」は、キリスト教史の研究者と学芸員、図書館司書のメンバーで構成され、国内キリスト教会への資料保存の啓蒙活動を行っている。本書は記念誌編纂の手引きだけでなく、様々な「教会アーカイブズ」の形成に、これから取り組んでいこうという人々にとって、有益な情報を集めた実用書である。

また、この研究会のメンバーは二八年から活動している任意団体「アーキビスト・サポート」

で出会ったメンバーが出版のきっかけになつていくという。そのため、教会だけでなく、人員や財源も乏しい小規模なアーカイブズにも役立つ現場の知識や経験が多く盛り込まれており、大変えがたい書であるといえよう。

まず、第一章では本書で使われる「教会アーカイブズ」という概念の説明が試みられている。ここで、「教会アーカイブズ」とは、「教会の現用資料および保存資料と、その整理、保存のこと」（一三頁）とされている。つまり、教会の公的記録が中心となるとしている。そして、聖書の記述を引きながら、「教会アーカイブズは負の歴史もそのまま保存することで後の日の反省と改革に役立てます」（一四頁）とし、「教会のアイデンティティ形成に寄与することになります。今日では宗教法人のコンプライアンスのために、一部の記録の保存と開示が求められるということも考えなくてはなりません」（一五頁）とその目的を明示している。

また、執筆者である山口自身の教会史料の発掘や史料保存の経験が語られ、教会を主軸とした共同の地域研究の重要性が指摘される。そして、「教会アーカイブズ」は「日本に根をおろし、歴史を形成しようとする教会の責任の一つと

いえる」（一八頁）と締めくくっている。

第二章では、実際の教会史編纂のノウハウを非常に詳細に叙述している。これは実際に編纂された『札幌元町教会40年史』の貴重な経験/体験談でもある。教会史を編纂する上での要点は三つ。教会の資料を整備する。年表カードを作成する。編目を細部にわたって点検することだという。

まず、教会史の編集体制や製作意義の確認について言及している。札幌元町教会では新しい信徒が急激に増えた中でこれまで教会が歩んできた歴史や取り組んできた課題を共有する必要が起ったからだという。また、「製作を支えるのは教会の存立と歴史を持続しようとする意思であるといえましよう。そして、教会史の内容に込められている期待は教会に下された恵みの確認、なされた伝道の成果のあかし、宣教への励まし、将来への展望」（二四頁）だという。そして、ここから、非常に具体的な編集計画の立て方や、印刷費用にいたるまで、詳細に記されている。教会史を発行するまでのタイムスケジュールや編集体制の整備などが丁寧に叙述されている。

第二に教会の資料整備と目録作成の方法について、非常に行き届

いた指摘が行われている。まず、教会内部の資料だけではなく、キリスト教関係の雑誌や新聞、さらに、官公庁の公文書や一般の新聞の史料収集も必須であるとしている。つまり、教会の「外部」にある教会という組織体に関わる資料の収集、保存を示唆している。そして、聞き取り調査の重要性を喚起し、できるだけ急いで教会にかかわる様々な人々の聞き取り調査を行い、その証言を「保存」すべきであるとする。また、教会資料自体の収集や資料目録の作成についてのコツも述べられている。

最後には「資料整備なくして教会史なし」とし、「資料整備を飛び越えて教会史の執筆にとりかかるのは、はなはだ冒険です。執筆にとりかかりたいというはやる気持ちを抑えて、編集の入り口の土台をまず固めたいものです。まして複数の執筆者による共同作業では資料の全容を明らかにし、情報を共有することは不可欠です。資料整備なしに取り掛かった教会史があるとすれば、それはおそらく限られた資料によって書かれた歴史ではないかと思えます」（二九頁）とまとめている。

第三に年表カードの取り方、まとめ方や執筆の方法についても言及されている。このように、本章

を読むだけでも教会史編纂に必要な基本的な知識や方法が理解できるようにになっている。当然、本章で書かれている方法は教会史のみならず、すべての年史編纂事業でも有効な知識や方法である。最後には、教会史編纂後の史料保存の重要性と、教会史の活用を提起している。このように、鈴江の豊富な経験に裏打ちされた本書の叙述はこれから教会史を編纂しようとする人にとって必読書であるといえよう。

第三章では教会史料の整理方法に関する極めて具体的な手法の紹介が記述されている。ここで、重要なのは一般的な歴史資料の保存方法と史料の修復などについても言及していることである。史料の保存や修復に必要な機材やその入手方法にいたるまで、非常に行き届いた記述となっている。また、近年、多く利用されているデジタルカメラによる史料撮影についてもその対処法や媒体変換の重要性について述べている。また、デジタルデータや電子メールなどの保存と活用についても指摘されている。

特にここで重要なのは「教会史編纂のために収集した資料は、単に教会史編纂が終了した時点で必要性がなくなるのではないという

ことです。むしろ、編纂を契機に集められた資料を「教会アーカイブズ（記録資料）」として、次世代の信徒のために永久に未来に残していくということ、信徒の誰もが理解する必要があります」（七五頁）と指摘していることである。

第四章では実際に「教会アーカイブズ」を形成する上で実践的な資料整理方法を説明している。まず各資料の性質や、第二章、第三章で述べられた資料保存と活用を具体的にどのように行っているかを具体的な事例に即して説明している。簡単に知りたいむきには九四―九五頁の「整理保存の基本作業」を参照して、この章を読めばわかりやすいだろう。「アーカイブズは一夜で形成されるものではなく、教会のわざとして組織的に時間をかけて形成し、運営されるものなのです。それには必ずしも高い専門性がなくとも、基本的な理解を持って地道にコツコツ、喜びと苦勞を教会員相互が共に分かち合いながら奉仕する気持ちがあれば必ずできる仕事です」（九三頁）とし、その心構えを説いている。

第五章では教会記録の活用と資料を利用した啓蒙活動を説明している。最初に啓蒙普及活動の重要性を力説し、「保存の重要性や保

存活動をアピールし、継続しての利用保証を働きかける活動です。文書保存への意識向上を促進」する効果を指摘している。そして、資料を継承する意義を語り、資料活用は社会における教会の説明責任と公共性を担保していると強調している。重要なのは「アーカイブズはただ資料を蓄積することを目的とせず、活用（公開）していくことを前提としていることを表しています。記録は活用できてこそ価値があり、活用されないと死蔵します。ですから、アーカイブズにとつての活用は保存とともに「一本の柱」（九七頁）と指摘する部分である。アーカイブズの特質を端的に表した記述だといえよう。

具体的には教会内の資料整理のあり方や、教会記録の閲覧に関するルール作り、レファレンスや記録の公開、発信活動としての教会での資料の展示会（！）、様々な記念日を活用しての「教会アーカイブズ」の意味の発信など多様な教会資料の「活用」の方法が提示されている。当然これらも無理がないように、信徒たち自身でとりくめるように、丁寧な解説が行われている。そして、教会員に教会自体の資料保存に関する意識を喚起する方法について述べられている。

付録では、教会記録にどのような資料があるかという一覧、「教会アーカイブズ」を始めるためのチェックリスト、アーカイブズに関する基本的な参考文献リスト、海外をも含めた主要な「教会アーカイブズ」の一覧などがあり、非常に有用である。本書を読んで、さらにアーカイブズについて深く学ぼうとする人々にとつてもよいてがかりとなるだろう。

本書の優れた点は、その記述の具体性である。一概に教会資料といつても、情報や資料があふれ、「専門家」ではないふつうの人々はそれをどう整理してよいか迷ってしまう。

本書は「教会アーカイブズ」について、五人のそれぞれの分野の専門家が、豊富な実際の経験と実例を提示しながら、記述されており、専門性と平易さを兼ね備えた書である。本書によって、これまでアーカイブズや歴史学に無縁の人々であっても過去の資料の保存・現在の我々の記録の後世への継承の仕方について学ぶことができるだろう。また、今後、自分の教会の「教会史」を制作しようとする人は、まず本書を読むべきである。しかし、私が本書を紹介した

のは教会史編纂や「教会アーカイブズ」にとどまらない画期性をもっているからである。

どうしてもこれまでアーカイブズ関係の書物は、歴史学やアーカイブズ学周辺の「専門家」や「専門家」予備軍たちでないとは理解するのも難しいものが大半であった。たとえば、私の家の本棚には国文学研究資料館史料館編『アーカイブズの科学』全二巻（柏書房）があるが、どう考えても気軽に読める本ではない。むしろ辞書代わりに使っているといっても過言ではない。本書でも参考文献にあげられている『アーカイブ事典』（大阪大学出版会）も予備知識がない人々には難しすぎるだろう。私は大学院生時代、国文学研究資料館アーカイブズ系が主催、運営するアーカイブズカレッジの短期研修コースを受講したことがあるが、その参加者の大半は博物館・図書館職員や行政の文化財担当者であり、それ以外の人々は「専門家」予備軍の大学院生であった。講義の内容もやはりそれらの人々を前提としたものであった。全くアーカイブズに関する予備知識のない一般の人々を対象とした書は、管見の限り、非常に珍しいのではないだろうか。

残念ながら、自治体史編纂事業で

や行政の補助金を得た編纂事業でもその後の史料整理・公開・活用が不十分であったり、散逸してしまつるところすら、現在でも少なくない。

本書を座右に置きつつ、地道に資料整理や活用を行えば、誰でも充実した教会史や「教会アーカイブズ」を形成することが可能だろう。内容も平易であり、わずかに三 円＋消費税、一四三頁の書とは思えない充実した叙述であり、手軽にアーカイブズ入門をすることができる。

しかし、本書にも問題がないわけではない。

第一に第二章でオーラルヒストリーの重要性を指摘しているものの、第三章以降では、全く紙や写真、データなどの記録資料のみの叙述となっている。単に話を聞くだけなら簡単なのかも知れないが、きつちりとしたオーラルヒストリーを行うにはかなりの準備と労力が必要なのは私自身の経験からも理解できる。ここでもオーラルヒストリーに関する経験からみるアドバイスやマニュアルがあれば、さらによかつただろう。また、「声の資料」は必要ないのだろうか？たとえば、カセットテープやデ

ジタルデータでオーラルヒストリーを記録することは多いが、ほとんど個人の所有になつていて共有化されていない。さまざまな「証言」やオーラルヒストリーも教会にとどまらず、さまざまな組織体にとつては重要なアーカイブズの一つである。第三章以降でも、オーラルヒストリーについての収集・保存・活用に関する一定の言及が必要であったと考える。

第二にキリスト教関係のアーカイブズはキリスト教主義の学校の資料館、文書館のものを代表として、付録にもあるように比較的多く存在する。鈴江が執筆した第二章のように、『札幌元町教会40年史』という非常に具体的な事例にそくした教会史編纂マニュアルというべき叙述は大変参考になつた。鈴江という「専門家」がたまたま信徒にいたという意味で特殊事例なのかもしれないが、それを割り引いても有益な記述といえるだろう。

しかし、第三章以降では史料の保存と活用について具体的な説明が行われているが、第二章のように、一つでもよいので、小規模なアーカイブズでどのような運営をしているかという事例があればよい。りわかりやすくなつたらう。一応、埼玉県の教会がコラムの中で触れ

られているものの、単なる所蔵史料の紹介に過ぎず、不十分である。あえて、繰り返すが本書の提起は「専門家」もいず、専任でアーカイブズの形成に携わる人員や財源もない中で、「ごくふつうの人々」が、どのようにして、手弁当かつ、できる範囲でアーカイブズを形成するかという点にあるはずである。実際に手弁当で小規模な「教会アーカイブズ」形成をおこなつている事例を示す必要があつたらう。適切な事例がみあたらなかつたのかも知れないが、具体的に本書で示されたような方法を実践する中で、どのような成果と課題があるのかは、大変気になるところである。また、そのようなアーカイブズ形成の実践のあり方のバランスシートは、「教会アーカイブズ」のみではなく、広く共有化されるべきだろう。今後の実践やその記述に期待したい。

このように、「教会アーカイブズ」そのものに興味関心がなくとも、専門の人材や財源のない、様々な組織体の資料整理や管理、年史編纂のノウハウやアーカイブ自体の基礎的な知識を知ることができるとおきたい。

（いのちのことは社、二〇一一年六月、一四三頁、一三 円＋税）



## 本の紹介

## 海外での部落史研究

## イアン・ニアリー著『部落問題と近代日本』

田中和男

(龍谷大学非常勤講師)

グローバル化の現在、日本においても世界の様々な地域や人物についての研究があり、逆に、世界の各地で日本の社会や人物について研究が盛んに行われている。研究者の人的交流も盛んで、日本の近代史研究の担い手が、日本人であるという常識は通用しない、日本をテーマとする研究の先行研究としても海外の研究動向を視野の中に収める必要が出てきている。人物研究でも、福沢諭吉はいまでもなく、北一輝、吉野作造、矢内原忠雄、丸山真男、賀川豊彦などについても、海外の興味深い研究蓄積がある。

部落史研究の分野でも、こうした動向は無視できないと思われる。幕末以降のグローバル化の中で、日本に訪れた人物によって、日本社会の中での被差別階級存在は認識されていた。ヘボン式のローマ字綴り法で著名な宣教師ヘボンの『和英語林集成』に「エタ」の項目があり、一九世紀末に来日し

たらフカディオ・ハーンは封建社会を引きずる日本の社会組織として、士農工商の下に置かれたエタ・非人の存在の注目している。彼が住んだ山陰のある地方でも「清潔で、建物も立派」で「格別のしるし」がないのに、近隣の住民が「この部落を通り抜けようと思ってもしない」現実を指摘している(『神国日本』)。日本社会の差別的な歴史に対する外からの関心は長い歴史を持つているともいえる。本稿で紹介するのは二〇一〇年に発行されたイアン・ニアリー著『部落問題と近代日本』である(Alan Nealey: The Buraku Issue and Modern Japan- The Career of Matsumoto Jiehiro, Routledge, 2010, UK)。ニアリーさん(以下、敬称略)は現在、イギリス・オックスフォード大学セント・アントニー・カレッジの政治学の教員 fellowであり付属の日産日本研究所長をされている。本書は、研究所の日本研究シリーズの一冊でもある。すでに一九八九年

博士論文を発展させた『戦前日本の政治抵抗と社会統制』(Political Protest and Social Control in Pre-War Japan: The Origins of Buraku Liberation, Manchester U.P. 1989)で、部落解放の歴史を、水平運動、融和運動の関係の中で展開している。また、日本の政治構造を分析した『日本の国家と政治』(The State and Politics in Japan, Polity Press, 2002)では、明治維新以降の日本の政治史、政党と政治構造、政策の諸領域を概観し、人権にかかわる政策の領域として、女性・部落民・在日朝鮮人・アイヌ・外国人労働者を具体的に取り上げている。人権問題についてはいくつかの共・編著があり、部落問題を論じておられる。こうした著作にあらわれているように、ニアリーの部落問題の関心が、日本社会の政治構造や、マイノリティ当事者の運動を含めた社会的排除と統合にあることが推測される。昨年、相撲界の賭博ややくざとの関係が騒がれた際には『朝日新聞』のオピニオン欄に「『変な国』のイメージを増幅」との記事を寄稿されている(二〇一〇年九月二二日)。

伝記を述べている。冒頭の「謝辞」で筆者がいうように松本の伝記としては「英語で書かれたものとしては最初」のものといえよう。イギリスで英語で発行される以上、松本の個人としての経歴だけではなく、松本が生きた日本、世界の政治、社会を含む広いパースペクティブの中で描かれていることも、本書の特色となっている。部落史に詳しくない日本の一般読者にとっては、表題通りに部落問題と近代日本を考える入門書ともなっているのは、著者自身の学問関心と方法論からいって、当然のことかもしれない。

松本の評伝としては、本書が資料などで依拠することの多い高山文彦の名著『水平記』などが刊行され、松本の生涯はよく知られてきているので、本書の内容を詳しく紹介することは不必要だと思われる。序論と八章を本文として、中国への彷徨から帰国して黒田事件を起こす若い時代(第一章)、水平社の発足と関わり(第二章)、徳川襲撃事件に関係して入獄した時期から衆議院選立候補まで(第三章)、一九三六年から四一年までの議員時代(第四章)、太平洋戦時下の松本(第五章)、占領期の松本(第六章)、一九五〇年代の松本(第七章)、晩年の松本(第八章)で構成されて

いる。それぞれの章に一五―三〇頁を費やしているから、戦前の水平社とのかかわりを量的にも多く使うというわけではなく、戦後の松本の活動についても同様のスペースを取っている。その点では「松本治一郎と部落解放運動の一〇〇年」の副題を持つ高山の『水平記』がどちらかといえば戦前の部落解放運動の時期を重視しているのは異なるバランス感覚を示している。

確かに松本は一九二〇年代からは水平運動の指導者であったことを筆者は認めている。しかし、松本は、部落差別や部落への偏見に反対するだけではなく、その背景をなす「政治的・社会的体制 *systems*」に疑問を持ち、三〇年代には国政レベルでの政治家としての経歴をもった。他方で、彼は家族経営の建設会社の経営者であり、事業の成功のおかげで、部落解放と国会議員としての政治的経歴を続けることが出来たことに注目している。こうしたトータルな伝記を叙述するには、周囲の人々が持つ神話に対しても批判的になる必要がある。「聖人列伝 *hagiography*」にならないことが、松本を支えた人々の期待であることを確認している（序文）。

人物の伝記、それも評伝である

場合、顕彰的な叙述になることが多い。社会福祉や社会運動の先駆者ともいわれるような人物評価については特にそうであろう。高山の『水平記』は、対象とした松本については肯定的である。後でも触れる、松本の戦時の近衛などとの接近について、次のように書いている。「現在、治一郎や全国水平社が戦争協力の道をたどったという批判がある。／批判はあつていないわけではないが、こうして歴史をさかのぼってみると、彼らは痛ましいくらい真摯に現実と格闘している。（四九〇頁）」。痛ましいくらい真摯を実証するのは書き手と読み手の心情でしかない。ニアリーの基本的スタンスも、概して松本に好意的である。それが「聖人列伝」とならないようにしているのは、彼の叙述が松本を取り巻く政治・社会的情勢にまな目を配っていることよっている。ここでも視野の広いバランス感覚が発揮されている。従って、松本に関する先行研究として金静美『水平運動史研究』を当然、著者は言及し、場合によっては依拠している。しかし金の研究が松本に対して「批判的 *critical*」に偏っていることに疑問を投げかけている。

金の研究は松本らの水平運動がアジアへの侵略性という点で日本

の帝国主義と同質だということを手張している。その中で若い松本が中国に赴いた契機として回顧した天竜・白竜の活動時期が間違っていると指摘した。ニアリーは中国の匪賊研究の専門家であるピリングスレーの研究と自分宛ての個人的な書簡をもとに、松本の回顧の中の具体的な名前は後の知識が混ざったとしても、松本の若い時代の中国には同様の匪賊は活動しており、そういう意味では間違った記憶とはいえないとした。金が帝国意識に影響を受けたアジア蔑視の行動として紹介する松本が偽の薬劑を無知の中国人に販売したことにしても、松本の活動の個人的な特徴を脇に置くと、はつきりした将来の方向を持ってない若い松本が、「視野を広げるため」中国に赴くことは驚くべきことではなく、「帝国主義が中国で行っていることを彼に知らせる」ことになったと位置づけている（二〇頁）。

戦時期の全体主義的な動きに対する松本の立場についての肯定的な評価もこの点に関係する。ニアリーは松本が近衛新体制への接近を試みた事実を詳しく叙述している。水平社内でも、旧共産党系の北原泰作、朝田善之助たちが右展開し、赤子としての平等を実現する皇民運動に接近する分裂行動

が明確になるのに対抗して、内務省系の中融との併合を模索した。政党が解消され大政翼賛会が成立した後の翼賛選挙にも当選し国会議員として国政を支えた。また金静美が考証した戦時下の日本漂白竹皮履物工業組合連合会と松本の役割の問題もある。こうして戦期の松本についてはニアリーは「三〇年代には、忍びよる全体主義への動きの抵抗を失敗に終わるが組織化しようとした一人であり」、「四〇年以降も戦時体制へ一層巻き込まれた」とはいえ、「支配体制とはせいぜい協力したのみで、責任を共有する程ではなかった」とするのである（一三〇頁）。

こうした松本に対する評価は、痛ましいくらい真摯に運動に打ち込んだという心情倫理でもなく、戦時の日本人はすべて戦争に責任があるとすると本質論的な観点から人物を描くのではないニアリーの姿勢が表れたものといえるが、それは、人物を取り巻く人間関係や政治・社会状況の中で位置づけようとするニアリーの方法論とかかわっていると思われる。ニアリーは松本が解放運動の父として重要な人物とは考えるが、松本の生涯がそのみによって語れないことを示している。松本の部落第一主義 *Black-First-ism* は彼の生涯を

貫く課題ではあつたが、部落第一主義は部落唯一主義とは違う。部落差別解消を優先する思考は、彼の視野を狭めたというより「混乱に対する気強さ」（一八頁）となつた。

松本が青年の彷徨を終えて部落問題に取り組む大きな契機となつたといわれるのが福岡での黒田事件であつた。一九二二年、福岡黒田藩の開始三百年の祝賀行事が計画されたことにたいして松本は反対の運動を開始し、有名な冊子を発行して撤回に追い込む。その運動の意図についてニアリーは「制度的な差別に徳川体制の支配的構造が責任を負っていると松本には感じられたことである。それは被差別共同体をその時代を通して苦しめ、その歴史的遺産は、日常生活で彼や同胞が今なお出会う偏見や差別であつた。福岡の部落民は黒田家に感謝するものは持たなかつた。しかし、冊子で彼が訴えたのは、地域の部落民だけに、あるいは主に彼らにだけではなく、「筑前の同胞」のすべてに対してであつた。彼らは、農民、職人、商人の後裔であり「われらすべての先祖は黒田家から不当に扱われた」のであつた（一九頁）」。

ニアリーは祝賀行事が被差別部落民にとつただけではなく県民全

体の不利益になることを訴えたことに松本の政治的手腕を看取し、それを全国民の利益に結合させていくところに松本の政治的履歴の「*the*」の成長を予感させている。被差別民の被差別からの解放とは、まさに誰もがなりうるマイノリティとしての人權の確立という普遍的な課題と結びついているということだと思われる。「この時点で彼は長期的な戦略を持つていたのが一九二〇年代の初頭には男性の普通選挙制度の導入が優先的な政治的課題となつていた。多数にとつて、それは時間の問題であつたにちがいない。黒田キャンペーンの中に、選挙に立候補し全国政治で認められる準備段階で有権者に自分の名前を知らさせる試みと見る事ができるのか（三〇頁）」。

黒田事件で現れた部落の発生が徳川時代の支配構造を背景にするという認識は、一九二四年の徳川家達襲撃事件に繋がっていくが、松本の攻撃が部落発生についての徳川家の責任追及にとどまらず、大正デモクラシー状況の中で徳川家達が議長を務める貴族院や枢密院を反民主的だとする批判の動きを松本が読み取つたと考えることが出来る。また黒田事件で示された地域でのリーダーシップと紛争解決の仲介者の役割が水平社の中

での彼の役割を高めることとなつていく。こうした松本の認識の深化は松本のものであると同時に筆者たるニアリーの人間認識の反映であろう。松本の生涯を部落解放運動に特化させ収斂させる方向ではなく、松本を部落問題と結びつけて検討しつつ、視野は部落問題の外側の政治や社会、世界の動きという全体とつなげて叙述していくのを、ニアリーの研究に読み取ることが出来る。

勿論、問題点がないわけではない。本稿では、ニアリーの研究のグローバルな視野を肯定的に紹介しているが、松本の活動の現場は近現代日本であり、彼に関する資料の多くは日本語で書かれたものであつた。「謝辞」や本文に述べられてるように、松本治一郎の孫にあたる松本龍氏所蔵の資料など、ニアリーが特別に接近しえた資料の存在も示唆されているにしても、母語である英語ではないというハンディは無視できない。日本人研究者が外国研究する場合と同様な課題であろう。ニアリーの著作でも、人名・地名などでの正確な部分は指摘しうる。水平社結成の先駆けとなつた西光万吉らの出身地が奈良の「Kasuyagata」としていたり、本文に漢字が示された中で、筑前叫革団が「呼革団」

となつているのは一応は、御愛嬌ということでもいいかもしれない。

もう少し深刻なのは、依拠する資料の性質である。ニアリーの研究は評伝ではなく、学問的研究であり、引用文献、事実の典拠は章末の註や本文内に頁数を含めて記されている。研究としての手続きは踏まれている。その中で圧倒的に多いのが、この紹介でも何度か触れた高山の『水平記』である。あるいは松本の発言と行動を叙述する場合も、後の松本の回顧や側近の思い出に依拠することが多い。高山の著書がいい加減というわけではない。回顧や思い出が虚偽であり事実を語っていないというわけではない。ここで問題にしているのは、松本だけではないが、松本のような人物の活動や思想を研究する際に、直接的な本人の発言や同時期の資料では、実証しえないことが多いという点である。松本研究の日本での水準こそが問題になるのかもしれない。あるいは、日本での松本や部落史の研究者が、グローバルな世界の中での研究に対して十分な発信をしていないことを自戒すべきなのかもしれない。そういうことに気付かせてくれるということでも、ニアリーの研究は興味深い。

## 課題 水内俊雄

## 本の紹介

『恥と名誉 移民二世・ジェンダー・カーストの葛藤を生き延びて』(ジャズピンダル・サンゲラー著、阿久澤麻理子訳) 山下明子 / 『日本の教育格差』(橘木俊詔著) / 『「悪」と戦う』(高橋源一郎著) / 『長崎旧浦上天主堂 1945-58 失われた被爆遺産』(高原至写真/横手一彦文/ブライアン・パークガフニ英訳) / 『LGBT BOOK』(NHK「ハートをつなごう」取材班) / 『手招くフリーク 文化と表現の障害学』(倉本智明著) / 『「在日」と50年代文化運動 幻の雑誌『ゼンダレ』『カリオン』を読む』(ゼンダレ研究会編)

土地差別調査事件の底流 大阪宅建業者実態調査が明らかにした現実 奥田均

猿・縁・奇縁 対談 村崎修二が訪ねる 2 「猿まわし」を知りたい(下) 織田紘二, 村崎修二

『縮図』から『女の一生』にみる新藤兼人の方法 部落問題に迫る遠近法としての映画 1 山本崇記

部落・差別の歴史 そのとらえ直しと論点 29 第4章(終章) 部落差別の歴史的な性格を考える 5 近世後末期・近代の胎動と部落差別 藤沢靖介

部落解放 638号(解放出版社刊, 2010.12): 630円  
特集 再考、貧困問題

貧困問題を超えて 部落解放運動から反貧困・脱貧困運動への提言 北口末広 / 政権交代で、貧困の現場はどう変わったか 巨額をかけて内職を支援 検証なき母子家庭支援は変わらない 赤石千衣子 / 生活権の奪還のために ベーシック・インカムはバンドラの函か? 山森亮 / ナショナル・ミニマムの今日的課題 金澤誠一

## 本の紹介

『熊野・被差別ブルース 田畑稔と中上健次のいた路地よ』(和賀正樹著) 上原善広 / 『学ぶたびくやくしく 学ぶたびうれしく』(守口夜間中学編集委員会編) かどやひでのり / 『ルポ在日外国人』(高賢侑著) / 『ザ・ママの研究』(信田さよ子著) / 『僕は何もやっていない、母さん助けてください!』(中南まり子・源太著) / 『万人のための点字力入門』(広瀬浩二郎編著) / 『格差と貧困に立ち向かう教育』(成山治彦著) / 『異形の日本人』(上原善広著)

猿・縁・奇縁 対談 村崎修二が訪ねる 3 表現者として生きる 高石ともや 村崎修二

部落・差別の歴史 そのとらえ直しと論点 30 第4章(終章) 部落差別の歴史的な性格を考える 6 明治期・近代化と部落問題 藤沢靖介

部落解放 639号(解放出版社刊, 2011.1): 630円  
特集 部落問題と向きあう若者たち 2

はじめに 内田龍史 / どこに行っても仲間がいる 宮崎懐良 / 青年がとにかく集まれる場を 長門実 / 下の世代の兄ちゃんになる 宮崎懐良・長門実 / 小説は部落問題を伝えるツール 玉田崇二 / ありのままを伝えたい 方佐江子

本の紹介 『アイデンティティと時代 1970年代の東大・セツルの体験から』(山田正行著) 中尾健次

保田耕志さんを偲んで 太田善照

アルザス・革なめし探訪の旅 中尾健次

部落の文化と歴史 草津温泉 1 ハンセン病湯治の歴史と

## 部落 川元祥一

インタビュー 在日コリアンの市民運動の新たな拠点をめざす コリアNGOセンターの新展開について 鄭甲寿

部落解放研究 190(部落解放・人権研究所刊, 2010.11)  
特集1 人権教育と道徳教育を考える

人権教育と道徳教育の関係性をめぐっての問題提起 平沢安政 / 人権教育の視点から道徳教育を考える 特設「道徳」教育を中心に 桂正孝

特集2 就職困難者の就労と生活 大阪地域就労支援事業相談者調査から

就職困難者の就労と生活 1 基本属性、就職相談と就労経験 福原宏幸 / 就職困難者の就労と生活 2 健康状態と住居 李嘉永 / 就職困難者の就労と生活 3 貧困と社会的排除 内田龍史

大阪市内各地区における子育て・子育て運動の現状と課題 青少年拠点施設検討プロジェクトの3年間の取り組みをふまえて 住友剛

子どもたちの進路保障をめざすキャリア教育の創造 差別と貧困の世代間の連鎖を克服するために 柴原成壽

人権啓発基本方針づくりの課題 上杉孝實

『部落解放研究』バックナンバー目次(1998-2010年)  
部落解放研究くまもと 60号(熊本県部落解放研究会刊, 2010.10)

特集 いま部落はどうなっているか

佐賀県被差別部落生活実態調査の意図と結果 中村久子 / いま部落はどうなっているか 佐賀県実態調査から見えてくるもの 内田龍史

座談会 樋口輝幸先生を語る会

仲覚兵衛と鹿児島牛馬骨粉業 坂元恒太

マイノリティ研究 4(関西大学マイノリティ研究センター刊, 2010.11)

『マイノリティ研究』の現在と将来 孝忠延夫

地球温暖化時代におけるマイノリティのための環境正義 李侑峰

少数民族権利保護の研究に関する総括 潘弘祥、李涵偉

少数民族概念に関するいくつかの問題 少数民族の権利論問題に関する研究 徳全英

水と村の歴史 25号(信州農村開発史研究所刊, 2010.3)

## 史料紹介

朝倉重吉『活動日記』(一九三〇年) 川向秀武 / 桑山村名主市之丞の日記 文政八年(一八二五)五月~八月 佐藤敬子

ライツ 137(鳥取市人権情報センター刊, 2010.10)  
今月のいちおし!! 『女たちのジハード』(篠田節子著) 田中美貴枝

ライツ 139(鳥取市人権情報センター刊, 2010.12)  
今月のいちおし!! 『1984年(新訳版)』(ジョージ・オーウェル著、高橋和久訳) 田川朋博

ルシファー 13(水平社博物館刊, 2010.10): 500円

「丹波マンガン記念館展」を開催して 仲林弘次

「『大逆事件』と部落問題 熊野・新宮グループを中心に」を開催して 仲林弘次

講座報告 丹波マンガン記念館の歴史と歩み 李龍植

歴史評論 728(校倉書房刊, 2010.12): 860円

穢観念と生命観 片岡耕平

## 中山英一先生追悼特集

部落大衆に愛され、解放をめざして生き抜いた中山英一氏を悼む 川向秀武 / 中山先生の浅科での講演から

月刊スティグマ 170号 (千葉県人権啓発センター刊, 2010.8) : 500円

特集 カミングアウト・被差別者が名乗るといふこと 被差別者の告発から宣言まで 鎌田行平

月刊スティグマ 171号 (千葉県人権啓発センター刊, 2010.9) : 500円

食えることと差別の関係 鎌田行平

日本の食肉文化と部落問題 桜井厚

橘史学 25 (京都橘大学歴史文化学会刊, 2010.11)

中世奈良の声聞師と興福寺 吉川夏那

地域と人権 1093号 (全国地域人権運動総連合刊, 2010.10.15) : 150円

立花町差別捏造事件を「捏造」するもの 2 週刊ポスト “連載「糾弾」” 批判 植山光朗

全国人権連第4回定期全国大会運動方針 (案)

地域と人権 1094号 (全国地域人権運動総連合刊, 2010.11.15) : 150円

立花町差別捏造事件を「捏造」するもの 3 週刊ポスト “連載「糾弾」” 批判 植山光朗

国民的融合論との対話 10 部落問題解決への理論的軌跡と展開 丹波正史

地域と人権 1095号 (全国地域人権運動総連合刊, 2010.12.15) : 150円

立花町差別捏造事件を「捏造」するもの 4 週刊ポスト “連載「糾弾」” 批判 植山光朗

国民的融合論との対話 11 部落問題解決への理論的軌跡と展開 丹波正史

月刊地域と人権 321号 (全国地域人権運動総連合刊, 2010.11) : 350円

特集 第6回地域人権問題全国研究会

月刊地域と人権 322号 (全国地域人権運動総連合刊, 2010.12) : 350円

特集 第6回地域人権問題全国研究会

ちくま 475 (筑摩書房刊, 2010.10) : 100円

青春の光芒 異才・高橋貞樹の生涯 41 第九章 上海・ウラジオストック・シベリア鉄道 2 沖浦和光

ちくま 476 (筑摩書房刊, 2010.11) : 100円

青春の光芒 異才・高橋貞樹の生涯 42 第九章 上海・ウラジオストック・シベリア鉄道 3 沖浦和光

ちくま 477 (筑摩書房刊, 2010.12) : 100円

青春の光芒 異才・高橋貞樹の生涯 43 第九章 上海・ウラジオストック・シベリア鉄道 4 沖浦和光

であい 583 (全国人権教育研究協議会刊, 2010.10) : 150円

人権のまちをゆく 52 芝原 阿波箱廻しのふるさとを訪ねて

人権文化を拓く 160 来民開拓団開拓慰霊祭 来民開拓団の心を受け継ぐ子どもたち 吉田文男

であい 584 (全国人権教育研究協議会刊, 2010.11) : 150円

人権のまちをゆく 53 天満・天神橋界隈を歩く

人権文化を拓く 161 一世の「思い」を受けとめる、生活支援活動 村木美都子

同和教育論究 30 (同和教育振興会刊, 2010.10) : 1,500円

「御同朋の教学」往生浄土 試論 過去帳の現実に立つて 麻田秀潤

承元の法難について 遠藤一

近世真宗差別問題史料 5 「諸事被仰出申渡留」 左右田昌幸

黒衣同盟をめぐる二、三の課題 廣岡祐涉著『大鳥山明西寺史』を契機として 奥本武裕

ヒューマンJournal 194号 (自由同和会中央本部刊, 2010.9)

融和運動の再評価 10 戦時下の経済更生運動 宮崎学

ヒューマンライツ 271 (部落解放・人権研究所刊, 2010.10) : 525円

特集 「ことば・表現・差別」再考

走りながら考える 114 メディアが冤罪に加担しないために 検察リークを鵜呑みにしていないか 北口末広

取材で見えてきた部落差別の現在 人脈記「差別を越えて」の連載を終えて 白井敏男

ヒューマンライツ 272 (部落解放・人権研究所刊, 2010.11) : 525円

大学における、これからの同和・人権教育、研究のために 若手研究者が先輩研究者に学び・考える 8 元木健先生 廣岡浄進

ヒューマンライツ 273 (部落解放・人権研究所刊, 2010.12) : 525円

「ことば・表現・差別」再考 反響編

走りながら考える 116 捏造、改竄はなぜ起こるのか 差別事件に取り組んだ経験から 北口末広

ひょうご部落解放 138 (ひょうご部落解放・人権研究所刊, 2010.9) : 700円

特集1 被差別部落女性の実態調査から

結婚差別の「複合」性 なぜ女性は男性より「差別的」な態度をとるのか 阿久澤麻理子 / 座談会 被差別部落女性の実態調査を終えて

特集2 韓国併合100年 在日コリアンの100年

海峡を越えて オモニ(母)の肖像 後編 / 定住外国人の人権擁護と地方参政権を考える集い パネラー野中広務、朴一 コーディネーター徐元喆

人権教育、道徳教育、そして同和教育 みんなおなじでみんないい? 外川正明

講座報告 「日々の暮らし そのつづき」 太田順一本の紹介

『排除と差別の社会学』(好井裕明編) 竹本貞雄 / 『夕茜 続』(畑井政雄著) 竹本貞雄 / 『恥と名誉』(ジャスピンダール・サンゲラ著/阿久澤麻理子訳) 高吉美

部落解放 637号 (解放出版社刊, 2010.11) : 630円

特集 ホームレス問題の新展開

ポスト・ホームレス自立支援法に向けて 今後の困窮者支援の方向性について 奥田知志 / ホームレス問題の地殻変動のなかで 若年ホームレス問題の現状と社会的支援 沖野充彦 / その人に必要な支援を継続して 高齢者・女性・障がい者など社会的弱者とホームレス問題 安江鈴子 / 包摂型の人と地域の再興につながる支援を 「ホームレス自立支援法」の評価と期限後に向けての取り組み

.11)

特集 村上春樹を読む

看護・医療と歴史社会 5 明治前期の伝染病と地域社会の対応 高久嶺之介

看護・医療と歴史社会 6 幕末京都における医療 有坂道子

第19回シンポジウム報告「幕末・明治の京都と女性」(辻ミチ子・高久嶺之介・細川涼一) 米澤洋子

研究所通信 377(部落解放・人権研究所刊, 2010.11): 100円

学習会報告 部落解放同盟綱領改正に伴う論点整理と新たな部落解放理論の創造にむけた課題 谷元昭信

こべる 212(こべる刊行会刊, 2010.11): 300円

ひろば 135 『同和はこわい考』が提起し続けているものは 無視と断罪を越えて 住田一郎

出版・書店の現場から 1 なぜ本を読むのか 角谷昌紀

いのちを生きる 35 夏の旅 長谷川洋子

記憶の旅から明日へ 写真と文 小林茂

濃水飛山記 藤田敬一

こべる 213(こべる刊行会刊, 2010.12): 300円

ひろば 136 「土地差別調査事件」と部落解放運動の課題 佐々木寛治

「韓国併合百年」を考える 1 私が「在日」であることの意味 金光敏

いのちを生きる 36 「大阪砂漠」を思う 長谷川洋子

記憶の旅から明日へ 写真と文 小林茂

濃水飛山記 藤田敬一

こべる 214(こべる刊行会刊, 2011.1): 300円

ひろば 137 なぜ学生たちは部落に対してマイナスイメージをもってしまうのか 石元清英

「韓国併合百年」を考える 2 ある無縁墓のこと 鳥根の聞き取り調査から 森昌義

いのちを生きる 37 冬の到来 長谷川洋子

濃水飛山記 藤田敬一

記憶の旅から明日へ 写真と文 小林茂

こりあんコミュニティ研究会通信 7(こりあんコミュニティ研究会刊, 2010.11)

戸手四丁目河川敷地区の暮らしの記憶 4 まちの解体 新井信幸

こりあんコミュニティ研究とジェンダー 梁優子

こるむ 1(在特会らによる朝鮮学校に対する襲撃事件裁判を支援する会刊, 2010.11)

民族的尊厳の回復の場としての朝鮮学校 金尚均

朝鮮学校の歴史 1 朝鮮学校の設立ラッシュと学校閉鎖令 金東鶴

在日朝鮮人史研究 40(緑蔭書房刊, 2010.10): 2,400円

私の独り言 「韓国併合百年」を考える 崔碩義

一九一〇年代在日朝鮮人留学生メディアの成立 印刷所と広告の分析からみる留学生と日本人実業家の関係 小野容照

一九二二年、中津川朝鮮人労働者虐殺事件 裴 美[ベヨンミ]

戦前における在日朝鮮人による関東大震災時被虐殺朝鮮人追悼・抗議運動年表 山田昭次

創立期日本共産党と在日朝鮮人共産主義運動 コミンテ

ルン文書からの再検討 黒川伊織

戦前期大阪における朝鮮人住宅問題 「不法占拠」クリアランスと共同住宅建設を中心に 塚崎昌之

在日朝鮮人の「身元調査」について 岩井警察署『朝鮮人関係綴』をもとに 福井讓

戦前・戦時下における福井県の在日朝鮮人の諸相 人絹織物・失業者・労働争議・内鮮融和団体 砂上昌一

「解放」後の朝鮮人帰還者数に関する再検討 鈴木久美

解放後の朝鮮人生活権運動における生活保護適用要求の台頭 在日本朝鮮人連盟の生活安定事業・貧困者救済を中心に 金耿昊

朝鮮高校出身、五〇代在日コリアンの「生活と意識」調査 東京朝高一九六八年度入学生(第二期卒業)のアンケートから 羅基泰

「二重徴用」炭鉱夫遺家族からの聞き書き 長澤秀

韓国内所載戦時体制期朝鮮人人的動員関連名簿資料の実態及び活用方法 鄭惠瓊/北原道子訳

狭山差別裁判 417号(部落解放同盟中央本部中央狭山闘争本部刊, 2009.12): 300円

野間宏とOさんの証言 1 庭山英雄

狭山差別裁判年間総目次 '09

史学雑誌 第119編第10号(史学会刊, 2010.10): 1,040円

書評 高野昭雄著『近代都市の形成と在日朝鮮人』 杉本弘幸

人権と部落問題 807(部落問題研究所刊, 2010.10): 630円

特集 児童虐待を考える

文芸の散歩道 倦むこと無き実行魂 融和運動家・藤範晃誠の初期文芸作品 秦重雄

人権と部落問題 808(部落問題研究所刊, 2010.11): 630円

特集 裁判員制度の意義と課題

文芸の散歩道 小林明著 小説「失路」 糾弾されなかったもう一つの「特殊部落」作品発見記 桑原律

本棚

水川陸夫『夏目漱石と戦争』 稲垣広和/飄々と生きる知識人の戦後体験 伊藤堅二『落葉集』を読む 鈴木良

人権と部落問題 809(部落問題研究所刊, 2010.12): 630円

特集 高齢者の人権

文芸の散歩道 高榮蘭の『破戒』論を評す 川端俊英

季刊人権問題 361(兵庫人権問題研究所刊, 2010.10): 700円

季刊「人権問題」総目次 第17号~20号

振興会通信 95号(同和教育振興会刊, 2010.11)

同朋運動史の窓 6 左右田昌幸

真宗 1280号(真宗大谷派宗務所刊, 2010.11): 250円

身元調査は、しない!させない!ゆるさない! 「身元調査お断り・過去帳閲覧禁止運動」の再確認を! 解放運動推進本部

信州農村開発史研究所報 112(信州農村開発史研究所刊, 2010.6)

塩尻宿の旅籠屋と宿屋との争い 瀧澤英夫

信州農村開発史研究所報 113(信州農村開発史研究所刊, 2010.9)

- 解放新聞 2497号（解放新聞社刊，2010.12.6）：80円  
ぶらくを読む 57 芸能民信仰と芸能の神 宿神の誕生  
上 湧水野亮輔
- 解放新聞 2498号（解放新聞社刊，2010.12.13）：80円  
解放の文学 56 「悪」なるものへの復讐 吉田修一と  
『悪人』 音谷健郎
- 解放新聞 2500号（解放新聞社刊，2010.12.27）：80円  
山口公博が読む今月の本  
『ショパン 花束の中に隠された大砲』（崔善愛著）/  
『ポー名作集』（エドガー・アラン・ポー著、丸谷オ一  
訳）/『部落文化・文明』（川元祥一著）
- 解放新聞大阪版 1846号（解放新聞社大阪支局刊，201  
0.10.25）：70円  
大阪の部落史を歩く 16 村に寺が建つということ 河内  
蛇草村の場合
- 解放新聞大阪版 1849号（解放新聞社大阪支局刊，201  
0.11.22）：70円  
大阪の部落史を歩く 17 寺院制度の「差別」と抗議 更  
池・渡辺村・河内富田の真宗門徒たち のびしょうじ
- 解放新聞改進黨 405号（部落解放同盟改進黨支部刊，20  
10.11）  
強権的な差別行政を許すな！ 「同和問題に係わる差別  
事象の処理に関する要綱」を一方的に廃止 上
- 解放新聞改進黨 406号（部落解放同盟改進黨支部刊，20  
10.12）  
強権的な差別行政を許すな！ 「同和問題に係わる差別  
事象の処理に関する要綱」を一方的に廃止 下
- 解放新聞京都市版 228号（部落解放同盟京都市協議会  
刊，2010.10）：150円  
コミセン転用計画その後～条例改正から「いきいきセン  
ター」へ～
- 解放新聞京都市版 230号（部落解放同盟京都市協議会  
刊，2010.12）：150円  
京都市との意見交換会
- 解放新聞滋賀版 1891号（部落解放同盟滋賀県連合会  
刊，2010.10.11）  
部落解放同盟滋賀県連合会第63回定期大会運動方針（案）
- 解放新聞東京版 754号（解放新聞社東京支局刊，2010.  
12.15）：90円  
あいつく東京の部落差別事件 1 格差社会の不満が要因  
に ネットへの有効な対応も 長谷川三郎
- 解放新聞奈良県版 922号（解放新聞社奈良支局刊，20  
10.10.25）：50円  
公開質問状 山下市長の人権・同和行政にかかわる真意  
を問う
- 解放新聞奈良県版 926号（解放新聞社奈良支局刊，20  
10.12.25）：50円  
主張 県連「部落実態調査」から見えてきたこと 1
- 解放新聞広島県版 2005号（解放新聞社広島支局刊，2  
010.10.5）  
ヒロシマ人権財団人権啓発講座講演要旨 部落史論争を  
めぐる論点 身分差別の歴史をめぐって 上 沖浦和光
- 解放新聞広島県版 2006号（解放新聞社広島支局刊，2  
010.10.15）  
ヒロシマ人権財団人権啓発講座講演要旨 部落史論争を  
めぐる論点 身分差別の歴史をめぐって 下 沖浦和光
- 解放新聞広島県版 2012号（解放新聞社広島支局刊，2  
010.12.15）  
部落解放同盟綱領改正についての意見書 部落解放同盟  
広島県連合会（2010年11月8日提出）  
語る・かたる・トーク 188（横浜国際人権センター刊，  
2010.10）：500円  
わたしと部落とハンセン病 59 林力  
信州の近世部落の人びと 65 斎藤洋一  
同和問題再考 118 賀川豊彦と部落問題 5 田村正男  
部落差別の現実 99 ネット型行動 4 江嶋修作  
語る・かたる・トーク 189（横浜国際人権センター刊，  
2010.11）：500円  
わたしと部落とハンセン病 60 林力  
信州の近世部落の人びと 66 盗賊を捕らえようとして四カ  
所負傷した又四郎 斎藤洋一  
同和問題再考 119 賀川豊彦と部落問題 6 田村正男  
部落差別の現実 100 人権運動のリーダー 1 江嶋修作  
語る・かたる・トーク 190（横浜国際人権センター刊，  
2010.12）：500円  
わたしと部落とハンセン病 61 林力  
信州の近世部落の人びと 67 警備の礼に和尚が部落一軒  
一軒を回る 斎藤洋一  
同和問題再考 120 賀川豊彦と部落問題 7 田村正男  
部落差別の現実 101 人権運動のリーダー 2 江嶋修作  
カトリック部落差別人権委員会ニュース 130（カト  
リック部落差別人権委員会刊，2010.11）  
足尾鉍毒事件 田中正造とキリスト者の群れ 2 倉橋克  
人  
かわとはきもの 153（東京都立皮革技術センター台東  
支所刊，2010.9）  
靴の歴史散歩 98 稲川實  
皮革関連統計資料  
関西大学人権問題研究室紀要 60号（関西大学人権問  
題研究室刊，2010.9）  
大坂町奉行所の刑事判例 4 大坂城代土屋氏御用留によ  
る 藤原有和  
「水平社創立宣言」文の基礎的考察 「複数起草者説」  
批判と誤字の解明 宮橋國臣  
カミングアウト（部落を名乗る）の意味について 住田  
一郎  
京都市政史編さん通信 39（京都市市政史編さん委員  
会刊，2010.11）  
児童公園・児童館・ちびっこひろば 上 森川正則  
京都部落問題研究資料センター通信 21（京都部落  
問題研究資料センター刊，2010.10）  
三浦参玄洞の水平社記事について 「中外日報」を中心  
に 1 秋定嘉和  
映画の紹介 『キャタピラー』（若松孝二監督，2010年）  
渡辺毅  
収集逐次刊行物目次（2010年7月～9月受入）  
グローブ 63（世界人権問題研究センター刊，2010.10）  
被差別部落からの移民 野口道彦  
「韓国併合100年」を考える 姜在彦  
人権の“館” 在日韓人歴史資料館 仲尾宏  
追悼 西島安則先生 上田正昭  
クロノス 32（京都橘大学女性歴史文化研究所刊，2010.

# 収集逐次刊行物目次 (2010年10月～12月受入)

～各逐次刊行物の目次の中から部落問題関係のものを中心にピックアップしました～

愛生 768号(長島愛生園慰安会刊, 2010.12): 270円  
創立80周年記念号

アイユ 233(人権教育啓発推進センター刊, 2010.10)  
人権とーく 対談 あるがままの人間として生きたい～性  
同一性障害を乗り越えて～ 虎井まさ衛、横田洋三

明日を拓く 84(東日本部落解放研究所刊, 2010.2):  
1,050円

特集 部落の人々の移動と越境

民俗学と人権・同和問題～自治体史編さん事業の現場か  
ら～ 上田喜江/聞き取り 15周年を迎えた阿波木偶箱廻  
しを復活する会 辻本一英、中内正子、辻本絵蘭 聞き手・  
友常勉/上州にやってきた阿波木偶箱廻し 赤城人形一  
座 友常勉

IMADR-JC通信 164(反差別国際運動日本委員会刊, 201  
0.11): 750円

特集 ダリットと部落をつなぐもの とりくみは続く

ウィングスきょうと 100(京都市女性協会刊, 2010.1  
0)

図書情報室新刊案内

『日本型ワーキングプアの本質～多様性を包み込み活か  
す社会へ～』(大沢真知子著)/『おひとりさま介護』  
(村田くみ著)

ウィングスきょうと 101(京都市女性協会刊, 2010.1  
2)

図書情報室新刊案内

『貧しい国で女の子として生きるということ』(遊タイ  
ム出版編)/『デートDVと学校～“あした”がある』  
(高橋裕子編著)

解放教育 516(解放教育研究所編, 2010.11): 770円

特集 学級集団づくりを吟味する～現実と『生徒指導提  
要』を照らし合わせて

解放教育 517(解放教育研究所編, 2010.12): 770円

特集 参加型人権学習が広がる条件～人間関係づくりか  
ら人権問題学習へ

解放新聞 2488号(解放新聞社刊, 2010.10.4): 120円  
ぶらくを読む 56 伝統芸能の始原を探る 1 湧水野亮輔

解放新聞 2489号(解放新聞社刊, 2010.10.11): 80円  
解放の文学 54 民族運動のより所 プラムディア『人間  
の大地』 音谷健郎

解放新聞 2490号(解放新聞社刊, 2010.10.18): 80円  
今週の1冊 『二酸化炭素温暖化説の崩壊』(広瀬隆著)

解放新聞 2491号(解放新聞社刊, 2010.10.25): 80円  
山口公博が読む今月の本

『詩集 異郷への旅』(直原弘道著)/『深夜の酒宴/美  
しい女』(椎名麟三著)/『小説の方法』(伊藤整著)  
今週の1冊 『国家論』(田原総一郎/姜尚中/中島岳志著)

解放新聞 2492号(解放新聞社刊, 2010.11.1): 120円  
主張 参議院選の敗北を乗り越え、運動と組織の根本的  
再生へ

今週の1冊 『ルポ 差別と貧困の外国人労働者』(安田  
浩一著)

フィールドワーク 楽学遊歩 ならまち界わいを歩く

「青年アンケート調査」からみる部落青年の現状(中間  
報告) 内田龍史

ぶらくを読む 57 伝統芸能の始原を探る 2 湧水野亮輔

解放新聞 2493号(解放新聞社刊, 2010.11.8): 80円  
今週の1冊 『部落差別をこえて』(臼井敏男著)

部落とキリシタンの足跡を求めて 栃木県佐野市協議会

解放新聞 2494号(解放新聞社刊, 2010.11.15): 80円  
解放の文学 55 自然を介した人間成長 長塚節と『土』

音谷健郎

フィールドワーク 大坂・悲田院長吏の世界と「悪所」  
をめぐって

今週の1冊 『激変!日本古代史』(足立倫行著)

解放新聞 2495号(解放新聞社刊, 2010.11.22): 80円  
山口公博が読む今月の本

『半分のぼった黄色い太陽』(チママンダ・ンゴズィ・  
アディーチェ著)/『父を焼く 上野英信と筑豊』(上  
野朱著)/『絶倫食』(小泉武夫著)

今週の1冊 『原子炉時限爆弾』(広瀬隆著)

解放新聞 2496号(解放新聞社刊, 2010.11.29): 80円  
新たなまちづくりへ 京都・千本

## 事務局よりお知らせ

今年度の部落史連続講座は無事終了しました。崇仁での出張講座、解放センターでの講座には多くの  
方々にご参加いただき感謝しています。3月末には『2010年度部落史連続講座講演録』が出来上が  
ります。ご希望の方は、メール・電話・FAXでご連絡ください。

次年度も、春と秋に6回の講座を予定しています。詳細は決まり次第、メールマガジン・ホームペ  
ージ等でお知らせしますので、是非ふるってご参加ください。

所在地 〒603-8151 京都市北区小山下総町5-1 京都府部落解放センター 3階

TEL/FAX 075-415-1032

URL <http://www.asahi-net.or.jp/~qm8m-ndmt/>

開室日時 月曜日～金曜日 第2・4土曜日 11時～17時(祝日・木曜(月2回)・年末年始は休みます)

交通機関 市営地下鉄烏丸線「鞍馬口」駅(京都駅より約10分)下車 北へ徒歩5分